

# 異端の靴か伝統靴か？ ロンドンブーツと厚底靴

シューフィル たち 城 いっ せい 生

1960～70年代は若者文化台頭の時代。ファッションの世界では、ケンゾー（高田賢三）、カンサイ（山本寛斎）、イッセイ（三宅一生）が、それぞれ70年前後にパリ、ロンドン、ニューヨークで華々しくデビューするなど、既成の枠にとらわれない若手デザイナーの活動が話題を呼んだ。



70年代のロンドンブーツ

靴の分野でも、キサ（高田喜佐）、マイエ（金田昌子）といった若手デザイナー、プランナーMなど新進のデザイン企業、カルツェリア・ホソノやコルドニエ品田といったデザイン力のある製造小売店が登場している。ただ、マーケット的には量産量販が急



今日でもミュージシャンなどに人気がある（写真提供:2点共、四谷・エスエー製靴）

拡大し、思いがけぬブーツブームに沸いた時代。靴のファッションビジネスはまだ胎動期であり、デザイナーやブランドが目ざされるのは、もう少し先になる。

そんな70年前後に登場したのがロンドンブーツ。厚底高寸のメンズブーツだ。派手なデザインや色、爬虫類素材のものなどが多く、男物としては現代でも超奇抜な靴である。源

流は60年代後半のスウィング・ロンドンのロックファッションにあると思われるが、日本では、70年に青山にあった製造小売店、カルツェリア・ホソノの創業者・細野勝さんの創案で作られ始めたといわれている。以後、70年代半ばにかけて、音楽・芸能関係者やおしゃれな若者たちを顧客に持つ四谷のエスエー製靴や横須賀など基地の街にあった製造小売店などでも作られた。時代のあだ花に終わるかと思われたが、その特異性から今日でも一定のファンがいるという。

同時期に浅草や神戸の靴メーカーが製造したのが厚底のカジュアル婦人靴。厚パン物、コルク&ウッド底物と呼ばれた前底10cm、ヒール15cmといったウエッジサンダルや高寸パンプスで、業界では当初、昔の高下駄みたいな靴が売れるの？と半信半疑だったが、パンタロンファッションの流行に乗って、10代から20代の女性たちの間で大ヒット、やがて紳士のパンタロン靴も登場した。以後も、90年代のアムラブーツや厚底ブーム、2015年頃の厚底ブームなど一定サイクルでクローズアップされている。

ロンドンブーツも厚底靴も、ファッション黄金期前夜の混沌から生まれた異端の靴とみなされがちだが、その人気・需要の根強さを見ると、ぽっくりや高下駄を好んだ日本人の伝統と感性を受け継ぐ高寸靴と言えるかもしれない。



浅草メーカーが製造した厚底紳士靴（75年頃）



神戸メーカーが製造した厚底サンダル（75年）